



土岐市教育研究所
TEL 0572-54-1111 (内373)
FAX 0572-55-6310
メールアドレス kyoiku@city.toki.lg.jp
所長 No. 569 河合 広映
発行責任者 山田 恭正
発行日 令和5年5月22日
題字 山田 恭正 教育長



撮影 肥田中学校

澤田 直樹 先生

『肥田中学校入学式 新入生代表の言葉』

A good education

土岐市教育研究所長 河合 広映

世の中にたえて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

在原業平

時期は過ぎてしまいましたが、六歌仙、三十六歌仙の一人でもある在原業平の歌です。日本の春といえば「桜」を思い浮かべます。1000年以上も前から桜は人々を魅了し、今なお桜を愛でる気持ちは私たちの心に受け継がれています。毎年、3月の中旬から後半になると桜の開花予想が発表され、お花見の様子がTVで映し出されます。その様子を画面越しに見ていると、外に出たくて何故だかわくわくむずむずしてきて日に日に桜人になっていきます。桜が満開になったころ、雨など降ると、「ああ、桜が散ってしまう。」と恨めしい気分になったりもします。岐阜県の開花予想は岐阜市加納清水川に標本木があり、ここが基準になっているようです。あれだけ忙しかった年度末・年度初めの時期でも、朝や帰りの通勤路、少しずつ桜が開花していく様子には心が癒されるものです。

近年、桜の開花や満開の時期は徐々に早まっているようで、今から50年ほど前までは岐阜県では4月8日ごろが満開日の平均でした。しかし、温暖化の影響なのか、ここ20年くらいの平均は1週間ほど早まり、4月2日ごろが満開日の平均となっています。今年、令和5年度の桜の満開日は3月23日(木)。これまでの観測史上最も早い満開日となりました。日本では、入学式には「桜」というイメージがあり、晴れの舞台を演出してくれていました。しかし、ここ何年かは入学式にはすでに桜は葉桜になっているような気がしています。「校庭の桜も満開になり、…」という入学式の挨拶も少しずつ変化しそうです。

4月7日(金)、市内の小中学校では入学式が行われま

した。当日は警報も心配されたあいにくの荒天でしたが、新入生たちは期待に胸膨らませ、雨風なんて何のその、これからの学校生活にワクワクしている表情が印象的でした。今年度は、泉西小学校、肥田中学校の入学式に参加をさせていただきました。中学生はまだ着慣れない制服を身にまとい、緊張はしていたようですが、「さあ、いよいよ中学校生活が始まるぞ。がんばろう!」という決意を感じ取ることができました。小学1年生は、普段着とは違ったフォーマルな服装に身を包んだごちない動作が、またかわいらしさを際立たせ、小さな体からいっばい緊張感と喜びを表現している様子に微笑ましさを感じました。1年生には少々難しい話も、しっかりと姿勢を正し、まっすぐ前を向いて話を聞く姿勢から園児から成長したちょっと大人びた様子を見せてくれました。

葉桜の 影ひろがり来 深まり来

星野立子

この時期は、葉桜の影が広がり、深まって来るように、季節は春から夏へと移り変わっています。4月のスタートからこれまで、目が回るほどの忙しさと余裕などなかったかもしれません。そんな今だからこそ、4月スタートの原点に立ち戻り、桜の花言葉を思い出しながら気持ちを新たにしてみることも必要なのかもしれません。ちょっと一息が大切です。この時期、もう桜は見られないなあ、と思ったら百円硬貨に3輪の八重桜が描かれていることを思い出しました。

桜の花言葉は「精神の美」、そして、八重桜の花言葉は「理知に富んだ教育 (a good education)」。

「繰り返し」は何を生むか

～継続は「学力」なり～

土岐市教育長 山田 恭正

庭の草木に元気がないので、「寒肥」といって冬に小さな穴を掘り、肥料を入れ込みました。

一年目の春は、あきらめてはいたものの依然元気がありません。その冬も再び寒肥を与えました。今年こそ春の訪れを待ちましたが、葉色は少し回復したものの期待外れの状況でした。もう一年頑張ろうと思い、寒肥を丹念に与えました。今年の春は、想像以上の回復ぶりで見事な花とさわやかな緑を醸し出してくれました。

とかく「教育」は、作物や植物にたとえられますが、心を込めて世話をしますと時間はかかるけど決してその成果は裏切らない。「教育」の「育」の大切さを改めて感じました。

「育」について難しい教育論を語ることはできませんが、懐かしい小学校の教員時代を思い出しながら身近な教育活動について考えてみましょう。

<授業の中で>

- ・算数の授業の開始後、「基本練習」を毎時間位置づけ、百マス計算や計算ドリルを時間を区切って毎時間練習する
- ・国語や理科では、教科書の文章の視写や図の模写を時間を区切って毎時間行う
- ・体育では準備体操後、駆け足や基本体操を時間を区切って毎時間行う

<日課の中で>

- ・帰りの会では学級の約束を必ず振り返る、一日の生活を時間を区切って毎日文章で残す
- ・授業後、毎時間必ず次の時間の準備をして休

み時間に入る 等々

若い時、先輩の取り組みを真似て訳も分からないままやっていたのですが、「繰り返すこと」、とにかく子供との根競べでやり続けていくと、見事に定着していったことを思い出します。

単純なことですが、できたことを一つずつ褒めながら、そうすることの価値を子どもたちに話していたように思います。

私が取り組んでいたことは、とにかく「繰り返し」による定着、それだけのことです。どんな小さなことでも身に付けたことは、その子どもの宝物、言い換えれば「学力」になると信じて取り組みました。

先ほど述べた授業や日課での「繰り返し」の取り組みは、年度の終わりになると何も言わなくても子どもたちが自分で取り組んでいました。「繰り返し」は「習慣」をつくり、「習慣」は「学力」の「礎」になったと信じています。

学級担任としての取り組みは一年です。小中学校九年間を計画的意図的に「繰り返し」の取り組みが出来たら、もっとすばらしい子どもに成長していくでしょう。

そこで、九ヶ年を繋ごうと取り組む濃南小中学校の一貫教育構想の一番の目的はここにあります。そして市の教育課題「校区連携」の目的もまさしくここにあります。

「繰り返し」は何を生み出すか、ちょっと立ち止まって今一度考えてみてください。

1 はじめに

3年間のコロナ禍が、社会に多大な影響をもたらしてきました。学校教育においても、同様です。子どもたちに及ぼす影響を考慮しつつ、「学びを止めない」学校運営を模索し、保護者や地域の理解を得ながら、学校経営を推し進めてきました。常に最適解を探求する営みが必要でした。固定観念に縛られることなく、創造的に捉え、考え判断し、活動してきた3年間でした。今年度は、新たなフェーズに入ってきています。しかしながら、コロナウイルスが消滅したわけではありません。刻一刻と変化する状況を冷静に見極め、最善の対応が引き続き求められます。冷静な判断力、決断力、実行力などが問われる日々は、これからも続きます。

2 これからの学校を見据えて

世の中の風潮にも変化が出てきています。マジョリティーからマイノリティーに焦点が当てられ、一人一人の生き方や考え方に耳を傾けるようになってきています。「同調圧力」という言葉も聞こえてきました。たとえ少数派であっても、自分の考えを主張し、広めることに価値があることが主流になってきています。また、「マスクの着用は個人の判断」にみられるように、個人の行動に責任を求められる傾向が出てきています。さらには、対話的AIの出現で、今ある職業が大きく変化するとも言われています。このように目まぐるしく変化する社会、風潮の中で、これからの学校教育を「不易と流行」の観点で見えていく必要があります。変えてはいけないこと、変えなければいけないことを見極め、実行に移すことがこれからの学校に求められることです。様々な諸課題を正面から受け止めつつ、児童生徒が将来に向けて夢や希望をもち、今まで以上に満足感・充実感のある教育活動を生み出すためには、我々が主体的に創造し、活力をもって学校運営していく必要があります。

3 土岐市校長会の方針

土岐市校長会では、上記のように運営テーマを掲げました。土岐市の小中学校の教職員とともに、学び合うことを大切にしていきます。そのため、次の3つの観点で活動していきます。

① トップリーダーとしての意識と必要な資質・能力の獲得意欲を高め合う組織的な活動

- ・学校のマネジメントに係る「三部会」からの提案、提言
- ・課題検討部会・人材育成部会・学校経営部会
- ・「小中学校部会」による校種別の具体的課題についての検討
- ・外部講師による資質・能力の向上

② 教育委員会をはじめとする関係機関と連携を密にした運営

- ・教育委員会事務局と校長会役員との定期懇談会の実施
- ・各種団体からの連絡や各種会議の参加による情報共有

③ 児童生徒が身に付けるべき資質・能力の育成に資する教育活動の改革

- ・「with コロナ」の教育課程の工夫改善
- ・時代の流れを汲んだ教育活動の推進
- ICT教育、学校運営協議会

4 責任あるリーダーとして

学校は、子どもたちの今と未来を創造し、幸せな人生を歩むようにすること、学ぶことが楽しいと思うことができる場所でありたいと思います。そして、教職員がやりがいをもって、子どもの育ちをともに喜びあえる場所でありたいと思います。土岐市校長会は、責任のあるリーダーとして、14名の校長・副校長、各々の信念を学ぶと共に、常にブラッシュアップを図っていきます。そして知恵を出し合いながら、これからの学校教育に向けて創造的、かつ、活力をもって取り組んでいきます。



願いをもって 心をこめて



泉小学校長
河地 敦子

新年度、新たな人との出会い、新たな組織や役割との出会いがあり、学校には新しい風が吹いています。前向きな風です。子どもたちや職員が願いや目標に向かって動き出すこの時期に思い出す言葉と、ここ数年考えていることを述べたいと思います。

1 「よくなってきているところには、必ず頑張っている子、努力している子がいる」

担任をしていたある年の5月、当時の校長先生が職員会で話された言葉です。学級づくりは初めが肝心と焦っていた時に聞いたこの言葉は、私の希望になり、以来、子どもや学級を捉える視点になりました。この視点で見ていくと、「よくなってきているのは、頑張っている子、努力している子がいるから」は本当にその通りで、仲間や先生の思いを受け止めて、よくしようと働きかけている子、応えようとしている子が確かにいるのです。子どもたちに感謝の気持ちが湧いてきました。「できていない」と全体を漠然と見て、一人一人の子の思いや思いの表れた姿を見逃してはいけなと思いました。また、少しずつよくなっていく過程で、子どもたち同士のかかわりや認め合いが生まれている、そういったわずかな成長が嬉しいと思えるようになりました。「できて当たり前ではなく、よくなってきたところにある『子どもたちの思いや姿』を捉えて価値付けていきましょう」、当時の校長先生の言葉を、私は今、先生方に伝えています。

これは学校も同じで、よくなってきているところには、職員一人一人の願いと尽力、そして協力があるからと感謝しています。

2 「子どもが主語」の学校へ

昨今、「子どもが自ら育つ学校づくり」や「子どもを主語にした学校づくり」がさかんに提言されています。私たちはこれまでも、子どもの主体性を育むことを大切にしてきました。けれども、教師が「教え、させる」指導からの脱却はなかなか難しく（もちろん必要な



場合はあります)、限られた時間での成功体験や習得を考えると、教師側で準備し方向付けてしまっていて、子どもが考え見出す場を奪っていなかったか自省しています。では、子ども自らよいものをめざし、「やる、やりたい」に向かうには...?そこには、受け身ではない子どもの願いや「わくわく」があること、そして、創造力や思考力、判断力を発揮する場があること、また、何のために（何を目指すのか）、どんな自分や仲間になりたいか、そのためにどうするか?つまり、子どもの課題解決が「自分事」になっているかがとても重要だと思います。そのためには、私たちはまず、「この活動を通して、子どもたちに（この子に）こんな姿に、こんなことを考えられるようになってほしい」という成長の物語を描く中で、子どもが主語の授業や活動の構想をもつことが大事ではないかと思えます。ここで、とねらいを決めた場で、遠回りやトラブルも成長の機会と想定して任せてみる、そうして子どもたちが試行錯誤の過程で見つけた価値あるものや互いのよさを共有し、自信にしていくことを期待したいと思います。



◇ ◇ ◇ ◇

昨年度、泉小の子どもたちが願いをもって取り組む姿が全校を動かしたことの一つに、「スマイルあいさつ運動」がありました。6年生が、修学旅行に向けた取組の中で、「6年生だけでなく、泉小のあいさつをよくしてこそやる意味がある」と全校に展開したのです。あいさつが全体的に弱かった本校で、校内のあちこちから気持ちのよいあいさつが聞こえてきたときは感動しました。この貴重な経験が、彼らの大きな自信になり、卒業前にも「泉小の新しい伝統をつくりたい」とあいさつに取り組んで、在校生にバトンを託していきました。

今年度、新6年生はその意思を受け継ぎ、「こんな泉小にしたい」と願いをもって、仲間と協力し、委員会活動に取り組み始めました。どんな活動や言葉や姿が生まれてくるのでしょうか。楽しみです。「子どもが主語」の学校へ、一步一步歩んでいきたいと思えます。

浅野教室にできること

土岐市教育相談・適応指導教室

浅野教室 室長 小木曾寛美

今、不登校児童生徒の支援においては「学校に登校するという結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるように支援する」ことが求められています。

昨年、浅野教室に相談に来られた保護者の方も、「学校に行けなくてもいい、社会にでて生きていければ・・・」と話されました。

では、どうしたら「社会にでて生きていく力」が身につくのでしょうか。学校ではないとしたら、どうやってその力をつけるのでしょうか。浅野教室は不登校児童生徒を受け入れる場所だから、それを期待されているのだろうけれど、浅野教室の支援がそうした力をつけているのだろうか、そもそも「社会的自立」とはどういう状態をいうのでしょうか。そんなもやもやした思いがありました。

それについて、浅野教室の職員で話題にしたことがあります。「社会的自立」について「税金が払える生活をする」「人と関わりながら生きていくこと。」などの色々な意見を出し合いましたが難しさだけが残りました。そうしたら令和4年12月にでた「生徒指導提要」にこんな記述がありました。

ここでいう社会的自立は、依存しないことや支援をうけないということではなく、適切に他者に依存したり、自らが必要な支援を求めたりしながら、社会の中で自己実現していくという意味であると捉えることができる

そして、

不登校で苦しんでいる児童生徒への支援の第一歩は、将来の社会的自立に向けて、現在の生活の中で「傷ついた自己肯定感を回復する」「コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける」「人に上手にSOSを出せる」ようになることを身近で支えることに他なりません。



これを読んだ時、浅野教室で日々おこなっているささやかな支援はあながち間違っているわけでも的外れでもないなあ、とほっとしました。

2年間余り浅野教室に通い、この春卒業して笑顔で高校へ進学した生徒がこんな文章を書いて残してくれました。

何かをする気力すらない、何も楽しくない、笑えない、そんな状態だった私は、浅野教室の見学すら行きたくありませんでした。ですが、当時、私の中でこの日々をなんとかしたい、前の明るい自分に戻りたい、こんな毎日から抜け出したい、という思いがわずかにありました。そうして少し悩んだ末見学に行くことにしました。そこが私の中で大きな転機だったのです。数日後、私は浅野教室の見学に行きました。先生達やそこで過ごしている子たちは、みんな温かく迎えてくれて、私は見学に行った次の日から、毎日通うようになりました。(以下略)

私たちが特別何かできたわけではありません。ただただ、その子を受け入れ、理解しようと努めただけです。大事なのは、この生徒のように、子どもたちの心の奥底には「何とかしたい」という思い、つまり「よりよく生きたい」という力がわずかでもあるということです。それを信じ、今年もまた、浅野教室に来てくれる子どもたちに寄り添いたいと思っています。

令和5年度土岐市嘱託研修員会

嘱託研修員会では、授業研究を通して土岐市の方針と重点「小・中学校教育方針」の実現を図っていきます。研究の成果は「教育とき」を通して皆さんにお伝えします。

「やってみたい」を引き出し、「できた」「わかった」と実感できる授業の実現

授業の土台 3視点

[視点1] 導入

「やってみたい」を生み出す具体的な課題

[視点3] 終末

「できた」「わかった」を実現する振り返り

[視点2] 展開

個別最適な学び

自分の考えをまとめる、さらに深める

協働的な学び

仲間と意見を交流する、一緒に考える

肥田小学校 橋本 梨々子 先生



子どもたちが「わかった」「できた」を実感できる授業づくりに努めます。

泉西小学校 青木 勇太 先生



子どもが楽しんで学べる授業を実践したいです。お願いします。

駄知中学校 宮本 真実 先生

研修を通して指導力向上に努め、生徒たちが「できた!」と笑顔になる授業づくりを実践していきたいです。



泉中学校 林 祥太 先生

生徒が「できた・わかった」と実感し、教科の魅力を感じてもらえる実践を目指して取り組んでいきます。



令和5年度 教育研究所の事業紹介

今年度も教育研究所では、教職員と子どもたちが様々な力を高めることができるように、下記のような事業によって、園や学校の教職員と子どもたちを支援します。

1 訪問・派遣事業

土岐市研究推進指定園・学校事業
「市教育の方針と重点」及び園・学校の教育目標の具現を目指した計画的な研究推進を補助すると共に、その研究成果を土岐市内外に広めます。 【園教育研究】 肥田小附属幼稚園〈発表〉 【学校課題解決】 泉小学校・泉西小学校・泉中学校〈初年指定〉 土岐津小学校・土岐津中学校〈中間報告〉 肥田小学校・肥田中学校〈発表〉 【授業改善〔東教推指定〕】 泉中学校〈初年指定〉 【金銭教育】 下石小学校〈中間報告〉
幼稚園・こども園・学校訪問
園・学校の教育目標及び「市教育の方針と重点」の具現状況と、教育課程の編成及び実施状況を把握し、今後の園・学校教育の充実に向けた改善策、方向性を確認します。
教職員資質向上サポート事業
経験年数6年目までの教職員が自信をもって職務に向かいながら、授業の指導力を高め、キャリアアップにつながるように支援します。

その他に、教職員指導力向上研修講師派遣事業、ALT派遣事業、「はつらつ人材バンク」派遣事業等があります。

2 研修事業

マイプラン研修
幼稚園・こども園の教職員を対象として、個人または園の研究主題に基づいた主体的な研修を行い、日常の保育実践に生かすことによって教職員の資質向上を図ります。
嘱託研修員会
「市教育の方針と重点」の具現と教職員の指導力向上を図るために、市内小中学校から選ばれた4名の先生を中心として、毎月1回、授業実践や研修会を実施します。実践の成果については、「教育とき」等を通じて市内に発信していきます。
教育実践論文・実践記録
園や学校の教職員が、論文や記録として日々の研究実践をまとめる過程を通して、指導力や論理力を高めます。
オンライン研修
今日的な教育課題や市内で共通理解を図るべき内容について、オンラインのメリットを生かした教職員の研修機会を確保します。

その他に、学力向上推進委員会、ICT教育企画委員会・ICT教育推進委員連絡会、サマーセミナー、運動好きな子ども育成、各種主任研修会等があります。

3 児童生徒能力開花応援事業

各種講座
小・中学生を対象として、子どもたちの興味・関心や技能、表現力等を高めることができるように、7～8月に様々な講座を設けます。



「積善有余慶」

駄知小学校 校長 水野 浩庫

表題の言葉「積善(せきぜん)に余慶(よけい)あり」(古代中国儒教の経典『易経』の一節には「積善(しゃくぜん)之家必有余慶」とある)は、駄知の人なら誰もが知る籠橋休兵衛さんのご自宅に今も飾られている言葉です。4年生の資料には「皆のために良いことを積み重ねていけば、後に自分も仲間も幸せになっていく」と解説されています。休兵衛さんの「地域のために」という思いがあったからこそ、多くの仲間と協力していくつかの事業を行うことができ、駄知の発展に大きな影響を与えることに繋がったのです。

駄知小学校は昨年度、創立150周年を記念して「ありがとうの会」を実施しました。これまでお世話になった地域の方々をお招きして、各クラスが工夫を凝らした会を行いました。また、6年生が取り組んだふるさと学習についての発表や、150年間を振り返る機会もあ

りました。後日、地域の方から頂いた手紙の中に「みんなは駄知の『宝』です」との言葉がありました。この言葉から、駄知の子ども達が、いかに地域の方々に見守られ大切にされてきたかを実感しました。また、子ども達にとって、自分達で計画し実行したことが、相手に喜んでいただけたという達成感を味わう良い機会にもなりました。

地域で子どもたちを育てるという思いは、前述の休兵衛さんが大切にされた「積善有余慶」の言葉脈々と引き継がれてきているためではないかと感じました。「駄知の子ども達のために良いと思ったことを行い続けてくださった」ことで、「子ども達が幸せな生活を送ることができている」ことに対して、感謝の思いでいっぱいになりました。

掲 示 板

本年度もよろしく申し上げます

【教育研究所】

所 長	河合 広映 (教育次長) <前列中央右>
主 任	片田 誠 <前列中央左>
副 主 幹	吉村 康介 <後列中央>
指導主事	内海 優里 <前列左> 井上 ゆう子 <前列右>
〃	古川 直利 <後列右> 林 奨司 <後列中央右>
〃	大脇 直仁 <後列中央左>
事務職員	大野 昭彦 <後列左>



【ALT】

マデリン・	モリス・	モロビック・	ウィリアム・
アルマン	メリサ・	マケイラ・	スワン
	ヤスコ	リー	



【浅野教室】

室長	小木曾寛美 <前列中央>
相談員	加藤 千穂 <前列右>
指導員	武田 元子 <前列左>
	柘植 智暁 <後列左>
	林 宏恵 <後列中央>
	佐々木乃里子 <後列右>